

昭和30年代刊行岩手県立盛岡短期大学『生活調査報告』と民俗学的視点

Comparison between Research Methods for Folklore Studies and "The Reports of Living Investigation" by Iwate Prefectural Morioka Junior College from 1959 to 1963

草場英子*

KUSABA Eiko

The movement for improvement of living developed after the Second World War, investigated by Iwate Prefectural Morioka Junior College Life Science Department from 1959 to 1963. The investigation also included folk customs of villages at this time. Firstly, these reports and the trend of the cooperation of academic organizations in those days are considered. Secondly, I research methods of "The Reports of Living Investigation" and folklore studies, comparing the methods of Yanagita Kunio.

Keywords : "The Reports of Living Investigation", folklore studies, Yanagita Kunio

『生活調査報告』、民俗学研究、柳田国男

はじめに

昭和30年代に、岩手県立盛岡短期大学生活科学研究部では、岩手県下の農村部、山間部、漁村部にある4つの集落¹を対象に、戦後日本全国で展開された生活改善の取り組みによって、岩手県ではどのくらい成果があったかを調査した『生活調査報告』4冊を出している²。第1号の冒頭に当時の学長里館健吉が書いた文章をみると、当時の盛岡短期大学の全教員が、この調査にかかわったようである。調査地では、現在でも当時のことを聞き伝えて記憶している者がおり、学生なども泊まり込みで調査に参加したという。

『生活調査報告』には、「年中行事・民間信仰」、あるいは「衣」、「食」、「住」といった、いわゆる民俗事象に関する項目がみられる。こうした各項目を総体として、集落の「総合的体系化」を求める試みをおこなったと当時の学長里館健吉は述べている³。これは、本稿2(2)で述べるが、戦後、九学会連合などがすすめた大規模な地域研究で、「総合」的研究を求めた方向性と重なる時代的背景があった。

この『生活調査報告』は、第二次世界大戦後の生活改善運動の成果と現状の調査報告という視点が一貫してみられる。生活改善運動の中心には、「かまど」や「茅葺屋根」を「時代遅れのもの」と見る動きがあった。これは、

「かまど」や「茅葺屋根」などに、「日本の伝統」「日本の文化」、「古きよきもの」に価値を見出していこうとする傾向が強い民俗学と正反対の立場をとるともいえる。しかし、この『生活調査報告』の中では、それがよいのか悪いのかという判断は示さず、淡々と実態報告がなされていく。本稿ではそうした『生活調査報告』のなかで、民俗事象に関する項目がどのようにとりあげられているのかをみていく。それにより、昭和30年代に刊行された岩手県立盛岡短期大学『生活調査報告』を日本民俗学の視点と比較する。このようにしながら、『生活調査報告』の時代的意義を指摘し、日本民俗学とは異なる民俗事象の調査分析方法を明らかにしていく。

なお本稿では、引用文献や人名等において旧字体が使われている場合、新字体に改めている。

1 『生活調査報告』の調査対象

(1)調査対象集落と報告年

まずは、昭和30年代刊行岩手県立盛岡短期大学『生活調査報告』で調査が実施された集落名と報告書の刊行年を記すことから始めよう。平成の今日(2009年)と昭和30年代(1959-1963年)では、行政区分が異なる場合もみられるが、ここでは当時のまま記しておく。また『調査報告』には「部落」という名称が使用されているが、これもここではそのまま記すことにする。ここでいう「部落」とは調査当時の行政村落の下位集落単位である⁴。

¹ 報告書には「部落」と記されたもの3か所、「地区」と記されたもの1か所である。

² 里館1959:「生活調査の報告について」

³ 報告書第1号、第2号の里館健吉の冒頭の文章による。

⁴ 第3号の表紙では、小国には「地区」という用語が使われている。小国地区は、川井村に合併される以前は、小国村と称しており、旧小国村のことを指している(盛

- 第1号 岩手県岩手郡西根村中村部落
昭和34年12月(1959年)作成
第2号 岩手県岩手郡玉山村洪民船田部落⁵
昭和36年2月(1961年)作成
第3号 岩手県下閉伊郡川井村小国地区
昭和36年12月(1961年)作成
第4号 岩手県久慈市小袖部落
昭和38年1月(1963年)作成

(2)集落の地目構成からみる生業的特徴

それぞれの報告書に記された土地の地目別面積構成比には、集落の特徴がうかがわれる。それゆえ、調査対象地域の地目構成から、各集落の特徴をみておこう。特に水田、畑、山林・森林の構成割合に、集落の生業形態の特徴が示されているので、以下にそれらを比較してみる。

西根村中村

水田46%、畑48%、山林1.8% (盛岡短期大学生活科学研究部1959:3)

玉山村洪民舟田

水田13.5% 畑51.5%、森林34% (盛岡短期大学生活科学研究部1961a:2)

川井村小国

水田0.2%、畑1.2%、山林71%の他、牧野12%、原野5.2% (盛岡短期大学生活科学研究部1961b:3)

西根村中村は、肥沃な土壌を持つ、成立が中世にまでさかのぼることができる古い農村である。

玉山村洪民舟田には、平地が多いが、砂地で漏水が多かったようである (盛岡短期大学生活科学研究部1961a:2)。そうした耕地と34%の森林によって、平地は住宅地として開発されていく。それにともない移住者が増加した。現在は盛岡市に組み込まれている。

川井村小国について、里館健吉は農村としているが、田畑がわずかしかなく、そのほとんどが山林、牧野、原野で、これが全体の9割近くを占めている。

第4号であつかわれた久慈市小袖は、漁業収入によつ

盛岡短期大学生活科学研究部1961b:4)。ただし、報告書の内部において、「小国部落」という使用法もみられる(盛岡短期大学生活科学研究部1961b:1)。反対に、第4号は表紙に、「小袖部落」と記しているが、内部においては「小袖地区」と記している箇所がみられる(盛岡短期大学生活科学研究部1963:1)。4冊の報告書において、「部落」と「地区」の厳密な使い分けはなされていない。

⁵ 船田は行政的には「舟田」という字が使用される。盛岡市玉山区庁が使用している平成20年の行政資料では、舟田が使用されている。しかし第2号の報告書内では、舟田と船田の両方の記述がみられる。以下では行政で使っている舟田を用いる。

て近隣地域の農地購入をおこない、人に小作をさせるという生業形態をとっていたが、第二次世界大戦後の農地改革により、小作地がなくなり、その結果、地勢的制約による狭い耕地に零細におこなう農地のみが残った。それは、調査当時、特に女性たちによって耕作されていたようである(盛岡短期大学生活科学研究部1963:10)。そうした歴史的事実と漁業が主たる生業であるためか、地目の構成割合は、記されていない。

すなわち、第1号では、中世には成立がみられる古い集落で、肥沃な土壌をもつ農村(盛岡短期大学生活科学研究部1959:1,3)。第2号では、平地ではあるが火山灰性砂壤土や腐食質壤土といった耕地条件の農村(盛岡短期大学生活科学研究部1961a:2)。第3号では、山地の農村(盛岡短期大学生活科学研究部1961b:1)。第4号では半農半漁地帯(盛岡短期大学生活科学研究部1963:序)がとりあげられている。

2 戦後の地域的総合調査への傾向

岩手県内で「生活調査」をおこなった背景には、戦後、日本全土にわたっておこなわれた生活改善運動が、昭和30年代の岩手県下でどのくらい普及しているのかを調査するという目的があった。第1号、第2号の冒頭には、いくつかの項目を調査することによって、集落の「総合的体系化」を試みることが記されている(里館1959:「生活調査の報告について」、里館1961:「生活調査の報告について」)。戦後、地域的総合調査のイニシアティブをとったのは、九学会連合の地域的総合調査である。九学会連合の調査が『生活調査報告』にも影響をおよぼしたのではないだろうか。それが里館の「総合的体系化」という言葉に表れていると思われる。ここでは、地域を限定させた現地調査をもとにした資料の「総合的体系化」の試みを、同時代におこなったという共通点から、比較していく。

(1)『生活調査報告』の構成

まずは『生活調査報告』の報告書の内容構成から総合的体系化についてみていく。『生活調査報告』は全4冊ある。この4冊の構成をそれぞれ比べると、若干項目に差異がみられるが、基本的に共通した項目で調査がおこなわれている。第1号の岩手県岩手郡西根村中村部落で代表させてみる。

第1章 自然的条件/第2章 社会的条件/第3章 経済的条件/第4章 家族構成と家経費/第5章 衣生活の実態調査/第6章 栄養・食糧調査/第7章 住生活の実態調査/第8章 育児に関する調査/第9章 保健衛生に関する調査/第10章 生活意識調査

第3号、第4号では第1章、第2章、第3章の「条件」が「概観」という用語に置き換えられるが、自然、社会、経済、衣・食・住、育児・保健衛生に関する項目を調査

している点が共通している。これらの個々の事象を調査することで、特定集落の生活全般を総合的とらえようとする調査であった。

(2)戦後の調査スタイルにみる総合的体系化：九学会連合の調査の場合

特定地域で総合的体系化から、さまざまな専門領域の研究者が同一のテーマで調査研究するスタイルは、戦後間もない時期にはじまった九学会連合の調査や研究が想起される。九学会連合は、日本人類学会と日本民族学会が主体として、はじめは六学会連合、そして八学会連合の時代を経て九学会連合となった⁶。分化がすすむ各専門分野に対し、近隣諸科学の連携をしようという戦後すぐにはじめられた試みは、平成元(1989)年まで続いた(柴田1994:270、小山1949:「あとがき」)。その雑誌『人類科学』の冒頭をみると、繰り返し、学会の理念、「自然・文化・社会の総合的把握」を目指していることが、記されている⁷。

九学会連合の活動は特定課題の「共同研究」と特定地域の「共同調査」の2つから成っていた(九学会連合編集委員会1994:1)。特定地域の共同調査は、1950年の対馬からはじめられ(～51年)、1952～53年の能登、1955～57年の奄美大島、1959～61年の佐渡、1963～64年の下北半島、1966～68年の利根川流域、1971～73年の沖縄、1975年～77年の奄美で終わる(柴田1994:276の表から)。言語学者の柴田武は、こうした地域調査は「米国でおこった areal study (地域研究) のはしり」だという(柴田1994:270)。これらの成果は、それぞれいくつかの出版社から出版されたが、書名には、調査地域名のあとに自然・文化・社会という副題がつけられたのが特徴的である⁸。

九学会連合は、こうした特定地域の総合研究を戦後から1970年代まで、30年近く続けた⁹(九学会連合地域文化の均質化編集委員会1994:2)。

⁶九学会連合は、1947年の六学会の連合大会をもってはじまった。当初、日本人類学会・日本社会学会、日本考古学会、日本言語学会、民間伝承の会(1948年以降日本民俗学会)、日本民族学会(1940～1962年まで日本民族学協会)の六学会であった。1950年、51年の八学会連合の時代を経て(日本地理学会、日本宗教学会の参加)、1952年(日本心理学会の参加)、九学会となった。1964年から東洋音楽学会が参加して十学会になったときも名称は九学会のままだった。1969年以降、日本考古学会が参加をやめ、九学会にもどった(柴田1994:276表、石田1967:I、池田1983:「はしがき」)。

⁷たとえば池田(1983:「はしがき」)、吉田(1990:「はしがき」)などにみられる。

⁸『対馬の自然と文化』(1954年古今書院)、『奄美—自然と文化』(1959年刊日本学術振興会)以外は、『佐渡—自然・文化・社会』(1964年刊平凡社)のように、副題に「自然・文化・社会」とつけられている。

⁹1980年代以降は、課題研究となった。

九学会連合が戦後おこなった「総合的体系化」を目指す地域研究は、盛岡短期大学の調査へ影響を与えたと考えられる。1959年から1963年にかけて岩手県立盛岡短期大学でおこなった『生活調査報告』は、衣・食・住の数量的分析に加え、社会や家族、保健衛生、生活意識など集落の総合的把握を目指しており、戦後の一時代の潮流として評価できる。

(3)岩手県北部の地域的総合調査

先にみたように、4冊の『生活調査報告』で調査された地域は、水田の多い農村、平地は多いが、畑や森林が多い農村、山林、牧野、原野が多く農地がわずかしかない地域、沿岸部漁村と、主たる生業が異なる4地域が選ばれ、調査された。これら4箇所を総合すると、岩手県の北部地域の総合調査であったとみることができる。

3 民俗事象への視点

人類学会と民族学会が中心になってはじめられた九学会連合は、1947年の第1回大会から1963年の第17回大会まで、アチック・ミュージアムを創設した渋沢敬三が会長をしていた。当時は民間伝承の会と称していた日本民俗学会も第1回の六学会連合時代から参加していた

(柴田1994:276表から)。こうしたことは、総合調査に人類学や民族学、民俗学の研究を含むことにつながっている。

盛岡短期大学の『生活調査報告』でも、総合的な体系を目指した調査項目の中に、「年中行事」などの民俗事象に関する調査がとりあげられる。盛岡短期大学の特色でもある衣・食・住に関わる項目は、特に精力的に調べられている。そこでここでは『生活調査報告』における民俗的事象にかかわる項目を、「年中行事」と「衣」「食」「住」にしぼり、柳田国男と関敬吾によって書かれた『日本民俗学入門』(1942年)を中心とし民俗学的資料収集の視点と比較してみる。

(1)民俗学の民俗資料収集に対する視点

柳田国男の大正から昭和にかけての活動、特に昭和十年代の活動は、地方で郷土の民俗を調査する人々に大きな影響を与えてきた。たとえば、柳田国男・関敬吾による『日本民俗学入門』は、「郷土」という地方で「聞き書き」をおこなう人々の手引書でもあり、1942(昭和17)年に刊行されている。著作中、民俗学について、わかりやすく解説した部分がある。そこに「民俗学の目標」が次のように記されている。「民俗学の目標が何れかにあるかは、勿論それぞれの立場によつて必ずしも同一ではないが、吾々はこれを内省の学と規定した。それ故に日本民俗学の重要なまた基本的な課題もこの点にあり、祖国の文化を真のあるがままの姿で把握し、我が民族の歴史的生活を認識する科学であるといえよう。」(柳田・関1942:472)(傍点:草場)

柳田が「内省の学」という言葉で表したように、そこでは「われわれ日本人」の「文化」の追求が基本命題となっている。

柳田国男の主導のもとに広げられた地域調査では、その地域の地域的語彙を重視しながら民俗・習慣の収集をおこなった。地域の調査者が収集した資料の取り扱い方法は、大きく2つに分けられる¹⁰。ひとつは、同一事象でくられる民俗・習慣に関する地域的語彙の収集を目指すものである。柳田国男の指導による1938年の『山村生活の研究』(柳田1938)、1949年の『海村生活の研究』(柳田1949a)にみられる日本全国からの民俗語彙を中心にした伝承資料の収集にこの姿勢がみられる。地域的特徴のある語彙を指標とした資料の収集方法は、昭和30年代以降、各都道府県の教育委員会などが中心になった「日本民俗調査報告書」では、調査が組織的になっていくとともに、ともすれば、項目主義的な報告になっていく傾向がみられた。岩手県でも1963(昭和38)年度の事業として「民俗資料緊急調査」による調査報告書が作成されている。そうして集められた民俗事象や語彙は、各県教育委員会を中心に、地理的マッピングが試みられていく¹¹。

ふたつめは、特定村落の民俗誌を作成する方法である。昭和十年代、柳田国男の提唱ではじめられた「郷土調査」は、戦後、民俗学研究所¹²の事業のひとつとして、シリーズで全国民俗誌叢書がつくられた¹³。その最初が1949年、柳田国男の佐渡の民俗誌『北小浦民俗誌』である。『北小浦民俗誌』には、柳田国男の民俗誌叢書の計画として、日本全国に残る「古い生活ぶり」を記録するために、各地の民俗誌叢書をつくる志が書かれている(柳田1949b:2)。地方の「残された」民俗に、日本の基層文化を見出そうとするこうした姿勢は、その後、長く日本民俗学で支持されている。

(2) 『生活調査報告』にみる民俗的資料データ収集の視点 ① 「年中行事」

『生活調査報告』全4冊では、すべてが「年中行事」について調査している。第1号、第3号、第4号では、月別年中行事について、日にちと簡単な内容が記述されている。集落の行事と個人の家行事、不定期の行事など、行事主体に基づく区別はなく、月毎の時間の経緯にそって記述されている。第2号では、明治時代に古い年中行事

¹⁰ このことについて、福田アジオも指摘している。福田はこれらを「地域研究法」と「比較研究法」と名付けている(福田アジオ1983:265-268)。

¹¹ 文化庁がおこなった『日本民俗地図』の作成は、都道府県別の成果をみることができる。1969(昭和44)年に最初の民俗地図が公刊されたあと、1985(昭和63)年まで続いた。岩手県は第24号として1977年に公刊している。(岩手県教育委員会1977)

¹² 成城大学におかれた。

¹³ その他、宮本常一『越前石徹白民俗誌』(福井県大野郡)、最上孝敬『黒河内民俗誌』(長野県上伊那郡美和村)など。

事は全く絶えているとのことから集落の菩提寺浄土真宗でおこなわれる行事を中心に記述している。「年中行事」に関する記述は比較的簡単な概観程度の説明にとどまるが、たとえば、第1号では①経済や家族構成との関係で調査をおこなっており、②集落の行事を、集落行事費との関係で比べている(盛岡短期大学生生活科学研究部1959:37-33)。第2号でも、同様な調査がおこなわれるが、若干異なる点がある。すなわち、年中行事をカレンダー上のも¹⁴、宗教上のも、民習上のも¹⁵と分け、その中の各行事の参加率を調べている。これにより、集落において、ある行事がどのくらい支持されながら維持されているのかがわかる。この点、日本民俗学にはあまりみない新しい視点の調査となっている(盛岡短期大学生生活科学研究部1961a:55)。

このように、集落で行われている年中行事をおこなう主体を、経済的規模で分け、家族構成との関係、それをおこなう参加者の割合を具体的な数値で表している点は、特徴的な調査方法だといえる。

② 「衣」

衣に関して、柳田国男は非日常的な「晴^{ハレ}」と日常である「褻^セ」のときのそれぞれの服装を、利用と工程に分けて注目すること、つまり「衣服の種類とその形態、更にその着方についても特に注意する必要がある」(柳田、関1942:69-70)こと、衣服の製作工程、衣服と関連する髪型、被り物、履物、服装に関する信仰について資料を収集するようになっている(柳田、関1942:69-72)。

これに対して、『生活調査報告』では、「衣生活の実態調査」に重きをおいている。それゆえ、衣服全体の数量的な把握、和服と洋服に代表されるような伝統的な着衣と「現代的な着衣」の割合やそれを着る世代に注目している。また、着用衣類の購入経路、製作者、生地について、寝具や洗濯、アイロンかけなど、衣生活に関するこまかな視点から数量的に調査されているのが特徴的である。つまり、調査項目から、「伝統的衣生活」と「現代的衣生活」を、それぞれ数量的、使用者年齢別実態把握という視点から調査されている。また、晴着についても、たとえば嫁入りのときの衣類を、下着から上着まで、また足袋、靴にいたるまで細かな着衣を世代別に具体的に調べることで、時代的数量的の変遷を知ることができる。こうした試みから、「伝統」と「現在」への変遷が、具体的に数値化され、知ることができる点が特徴的である。これら数量的に具体的に把握し、比較しようとする視点は、「日本の基層文化」を消滅する前に収集することを急務と考えてきた日本民俗学的資料とは異なる視点での収集といえる¹⁵。

¹⁴ 本文では「制度上」という名称を使用

¹⁵ たとえば、各県の教育委員会おこなわれた「緊急調査」の「緊急」という字に、「民俗消滅」への危惧が表されている。岩手県では1963(昭和38)年に昭和38年度事業「民俗資料緊急調査」がおこなわれた(日本民俗調査報告書集成1995)。こうした「消滅」という語り口は、高

③「食」

柳田国男・関敬吾の『日本民俗学入門』には「食制」という項目がつけられ、調理の方法、摂取の時と仕方を知ることで、「信仰の歴史を明らかにする」（柳田・関 1942：86）としている。そのために食は、食糧（主食、副食、調味料の種類など）、食品¹⁶、食具（調理用具）、食制（食事の回数、神供）の4つに分けて考えることが提唱され、100の質問項目が用意されていた¹⁷（柳田・関 1942：86-88）。それが1974年につくられた上野和男他編の『民俗調査ハンドブック』では「食」の質問項目は8つとなり、1983年の福田アジオ・宮田登編『民俗学概論』では、目次・索引から「食」に関する項目が消えている。

『生活調査報告』では、第1号では栄養・食糧といった面から調査が具体的数値で、全国平均との差が考慮されていた（盛岡短期大学生生活科学研究部 1959：56-60）。それが第2号では日常食の献立や食品、調理について具体的に調査することで、栄養等について具体的数値で調査されている。農繁期にも注意をはらっている。衣類同様、食でも「日本の伝統的食事」以外の食品に注意が注がれている。たとえば牛乳だけでなく牛乳を使うヤクリーム煮、カレーなどから牛乳の摂取について、家族構成、摂取世代、乳牛の飼育頭数と生産量とに分けて調査をおこなっている。また味噌、醤油、砂糖、油といった基本調味料については、年間にわたって使用量を調べ、その他、当時は使用頻度が高くなかったと思われるソース、カレー粉、化学調味料などについては所有の有無を調べている。これらに加え、調理をする担当者の年齢も調査している。こうした食の結果として、体格の比較を全国や岩手県、盛岡などもおこなっている（盛岡短期大学生生活科学研究部 1961：74-86）。世代別の数値的把握と食の結果としての体格調査など、具体的な食の実態が示されている。

④「住」

柳田・関の『日本民俗学入門』では最初に「住居」という項目について記述がある。そこには村の形態との関

度経済成長によって、「伝統」的生活が「消滅する」という危機観により、「緊急」を要する事態として文化庁主導でおこなわれた調査である。その後、「消滅」の語り口に対する批判がおこなわれて久しい。たとえば1980年代のホブズボウムに代表されるイギリス社会史学派的「創られた伝統」の視点などは、遠い昔から受け継がれてきたものと思われる「伝統」が、以外と新しく人工的に創り出されている点を指摘している（Hobsbawn & Ranger 1983）。地方に「残存する」「消滅する民俗」という語り口によって日本全国でおこなわれた民俗調査事体、一時代をつくった流れとしてとらえることができる。民俗誌の歴史的考察の対象になりうるものである。

¹⁶ 「食糧と混同される」（柳田・関 1942：87）との記述があるように、食糧と食品の区別が明瞭ではないように思われる。

¹⁷ たとえば「年中行事」には125の質問項目、「農業」では160の質問項目がある。（柳田・関 1942）

連で住居を観察し、土地の利用、地形との関係に注目することが説かれている。また火は生活の中心であるので、イロリやカマドに注目し、これに関連した火器、燃料、照明の問題と一括して資料を収集するよう説かれている（柳田・関 1942：45-46）。この他、建築用材の切り出しから家移りにいたるまでの慣習や家の信仰に注意した160の質問項目が用意された（柳田・関 1942：47-68）。

『生活調査報告』では、第1号では、伝統的曲がり屋、曲がり屋を分離させた家、2階建など、伝統的家屋の変遷過程を割合や家屋の方向を調査しているのが、生活改善とのかかわりから注目される。また住生活の実態として、暖房施設についても、伝統的なイロリから、堀コタツ、ストーブと、その変遷や家屋の改築など、変遷を数量的に把握しようとしているのが注目される（盛岡短期大学生生活科学研究部 1959：60-68）。また、第3号では、建物の構成と広さ、風呂・便所などの広さ、家族の就寝時の組み合わせと部屋の広さを数量的に把握している（盛岡短期大学生生活科学研究部 1963：95-97）。

⑤データ収集の視点—日本民俗学との比較から

以上、細かくみていくと、『生活調査報告』には民俗的データが多数見出せる。こうした日本民俗学のデータ収集の傾向と、『生活調査報告』の資料収集の傾向をまとめてみると次のことがいえる。まず、日本民俗学では、「常民」という言葉に示されるように、日本人の世代や階層を越えた基層文化を求める傾向がある。そのことは、集落で行われている「伝統」と「実態」を数値化し、それらの比率を求めていく『生活調査報告』と大きく異なる視点だといえる。一方、『生活調査報告』では、実態を世代別、家の規模（家族構成とその構成員、耕地などの面積など）から傾向を求めようとしている傾向がある。本稿では『生活調査報告』の年中行事と衣・食・住について簡単にとりあげたが、その他の項目についても、同様の数値的分析視点が見出せる。

おわりに

本稿では、昭和30年代に刊行された岩手県立盛岡短期大学の『生活調査報告』全4冊について、民俗学的視点との相違をみてきた。

昭和30年代は、戦後すすめられた生活改善運動の成果が表れており、それが地方にどのような形で浸透しているのか。そうした実態を知るために「生活調査」による「総合的」調査がすすめられた。そこには戦後にはじめられた九学会連合の地域調査研究の「総合」という共通した目的を見出すことができた。調査規模や分野において違いがみられるが、両者とも、自然や社会にも注意をはらった総合調査がおこなわれており、当時の調査・研究の傾向がうかがえた。また、4冊全体で、岩手県北部の種々の生業を主とした集落があつかわれている点が総合的地域調査として注目される。

『生活調査報告』で調査された民俗事象に注目してみると、柳田国男が指導した日本民俗学の調査方法とはかなり異なった視点が見出せた。それは「内省の学」とし

て、日本人による日本的なものを求める民俗学的視点とは異なり、生活改善運動後の実態を調査する視点から「伝統」と現在の「実態」を、数値的に求め、その変遷を家の規模や世代別に見出そうとする姿勢がうかがえた。ここに、「民俗」という事象をあつかいながらも、日本民俗学とは異なる視点でおこなった『生活調査報告』を見出すことができる。

昭和30年代刊行の岩手県立盛岡短期大学『生活調査報告』全4冊を民俗学的視点と比較してきた。近年日本民俗学には新しい方向性を見出そうとする動向がみられるが、そうした中で昭和30年代の岩手県立盛岡短期大学の調査は、日本民俗学にとって非常に示唆に富む方向性が含まれていると考える。

【引用文献・参考文献】

池田次郎

1983「はしがき」(『人類科学』35) 九学会連合編集

石田竜次郎

1967「はしがき」(『人類科学』20) 九学会連合編集

岩手県教育委員会

1977「岩手県民俗地図—民俗文化財緊急調査報告書—」
(『北海道・東北地方の民俗地図』1 北海道・
青森・岩手 東洋書林 復刻版(2000)より)

上野和男他編

1974『民俗調査ハンドブック』吉川弘文館

九学会連合下北調査委員会

1967『下北—自然・文化・社会』平凡社

九学会連合地域文化の均質化編集委員会

1994『地域文化の均質化』平凡社

九学会連合利根川流域調査委員会

1971『利根川—自然・文化・社会』弘文堂

里館健吉

1959「生活調査の報告について」(盛岡短期大学生生活科学研究部『生活調査報告』第1号)

1961「生活調査の報告について」(『生活調査報告—岩手県岩手郡玉山村渋民船田部落—』第2号)

柴田武

1994「九学会連合と私」(『地域文化の均質化』平凡社)
日本民俗調査報告書集成

1995「北海道・東北の民俗—岩手県編—」三一書房

福田アジオ

1983「民俗学研究法」(『日本民俗学概論』福田アジオ・
宮田登編) 吉川弘文館

福田アジオ・宮田登編

1983『民俗学概論』吉川弘文館

盛岡短期大学生生活科学研究部

1959『生活調査報告—岩手県岩手郡西根村中村部落—』
第1号

盛岡短期大学生生活科学研究部

1961a『生活調査報告—岩手県岩手郡玉山村渋民船田部
落—』第2号

盛岡短期大学生生活科学研究部

1961b『生活調査報告—岩手県下閉伊郡川井村小国地区—』
第3号

盛岡短期大学生生活科学研究部

1963『生活調査報告—岩手県久慈市小袖部落—』
第4号

柳田国男・関敬吾

1942『日本民俗学入門』日本出版配給株式会社

柳田国男

1938『山村生活の研究』国書刊行会(1975 復刻版)

1949a『海村生活の研究』国書刊行会(1975 復刻版)

1949b『北小浦民俗誌』(全国民俗誌叢書1 三省堂)

吉田貞吾

1990「はしがき」(『人類科学』42) 九学会連合編集

Eric Hobsbawm & Terence Ranger, eds.,

1983 *The Invention of Tradition*, Press of University of
Cambridge.

*本稿は、平成20年度岩手県立大学の学部等研究費(学部プロジェクト研究費)によってなされた調査・研究の成果の一部である。

(研究課題:「現代型環境変化と地域における生活文化の変容に関する研究」研究代表者 佐々木隆)